

広域 社会

<オオカミ絵> 復元に前進 東京芸大引き受け

東京電力福島第1原発事故で避難が続く福島県飯館村で、2年前に焼けた山津見神社のオオカミの天井絵が、今年夏に始まる復元作業でよみがえることになった。東京芸術大が制作を担う。再建中の拝殿が完成後の来春、まず96枚を奉納する。福島県美術館関係者も「貴重な地域文化を紹介したい」と展示を検討し、神社と地域の再生を重ねる住民たちに朗報となりそうだ。

復元を行うのは、同大大学院の荒井経准教授と保存修復日本画研究室。焼失直前の天井画を調査し、住民らと復元を模索してきた和歌山大観光学部の加藤久美教授が依頼した。三井物産環境基金の助成金を活用する。

荒井准教授は、天井絵、ふすま絵、杉戸絵などの修復保存の第一人者。加藤教授の同僚サイモン・フーンさん（特任助教）が撮影した計240枚の天井絵の写真を分析し、現地も訪れて復元の構想を練ってきた。

「技法は簡潔だが、オオカミが自然の中で生き生きと暮らす情景を描き、当時の人々に身近で特別な存在だったと分かる」と話す。

その上で、忠実な復元のやり方でなく「原作の絵の図象とぬくもりを継承し、百年後の住民にも伝えられるよう、飯館の豊かな自然を私たち自身が感じながら心を込めて描きたい」と言う。

担い手となる学生たちと6月に神社を訪ね、同行する加藤教授の講話を聴く。杉板の下地作りや筆遣いの練習を経て、夏から一気に大学で制作を進める計画だ。「1人でも多くの学生に被災地との関わりを経験してほしい」と話す。

11月下旬にある山津見神社の例大祭で披露したいという。奉納は来春の予定で、再建中の拝殿（5月末完成）の天井に合わせ、第1弾として96枚を掲げる。

荒井准教授、加藤教授の知人で、縁をつないだ福島県美術館の増淵鏡子学芸員は「オオカミの信仰を密度濃く形にした天井絵は例がなく、県の文化財として貴重」と話す。奉納前に絵を公開する展示を検討し、復元に関わってきた人々の活動も紹介したいという。

天井絵は1904（明治37）年、当時の宮司、久米中時が拝殿を建てた際、旧相馬中村藩の御用絵師に描かせたと伝わる。拝殿は13年4月に全焼し、加藤教授や神社がある佐須地区の住民、支援するNPO法人「ふくしま再生の会」が天井絵復元を模索してきた。



写真から試作したオオカミの絵を手にする荒井准教授＝東京芸術大

拡大写真



再建工事が進む山津見神社の拝殿＝福島県飯館村佐須

拡大写真

2015年04月21日火曜日